

氏名（本籍）	鍋島真理（佐賀県）
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第82号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位論文等題目	〈論文〉バリ島のキドゥン歌謡研究
論文等審査委員	
（論文審査主査）	東京芸術大学 助教授（音楽学部） 植村幸生
（論文副査）	〃 〃（〃） 塚原康子
（〃）	〃 〃（〃） 大角欣矢
（〃）	〃 教授（〃） 片山千佳子
（〃）	〃 名誉教授（〃） 柘植元一
（〃）	聖心女子大学 教授 岡崎淑子
（〃）	沖縄県立芸術大学 助教授 梅田英春

（論文内容の要旨）

「キドゥン *kidung*」という用語は古ジャワ語に由来し、「歌」を意味した。そしてその後、ヒンドゥー＝ジャワ文化において、土着の韻律的な規範にしたがって創作された詩編のジャンル名として用いられるようになった。この用語は、ヒンドゥー＝ジャワ文化と密接な関係にあったバリにおいてもさまざまなレベルにおいて定着したが、なかでもそれがゲルゲル王朝からクルンクン王朝時代にかけて誕生した、新たな韻律的な規範—この韻律は今日では「トゥンガハン *tengahan*」と呼ばれている—にしたがって創作された詩編のジャンル名として用いられるようになったのは、バリにおける固有の発展といえるだろう。また、そのような文学的なコンテクストとは別のところにおいて、「キドゥン」という用語が、人々の信仰心とともに培われてきた歌謡表現の総称として認識されているのも、大きな特徴である。もっとも、このような認識は、一つの定義としてではなく、いわば慣習的なものに由来する感覚的な枠組みとして捉えたほうが適切であり、その現象にはある意味で便宜的な側面があるかもしれない。しかしそうであったとしても、それはバリの人々の抱く感性のなかに、世俗的な行為とは区別された歌謡の領域が存在することを示唆しているだろう。

本研究では、この、今日まで継承されている「人々の信仰心とともに培われてきた歌謡表現」のなかに、二つの異なる側面を見だし、神に近づく行為が反映される二つの表現として捉える。そして、そのうちの片方に、上に挙げたトゥンガハンと呼ばれる韻律にしたがって創作された中期ジャワ語の詩編のジャンル（以下トゥンガハン韻律詩）を位置づける。トゥンガハン韻律詩の歌唱を、古代ジャワ文学が継承されてゆくなかで、マクロコスモスに向けられた芸術表現として確立された美的経験を促す表現として捉え、その韻律的および音楽的規範と歌唱様式について考察する。それに対し、もう片方には、同じ文化的背景のなかに誕生したことが推測され、人間の精神、すなわちミクロコスモスに対して、呪文のようにして用いられることを目的として創作された、チュチャンクリマンと呼ばれる一連のテキストの歌唱を位置づける。チュチャンクリマンとは、今日では一般的にその実際的な機能性を主眼に「子守歌」として説明される。また、実際にそれは時の流れとともに子守歌として継承され、発展してきたことが推測される。しかし、本研究においては、それが本来神に近づくための媒体として創作され、人間の生命にまつわる神秘に触れることによって、精神を強くし、転じては「守る」ことを目的とした歌謡表現であったことを説く。

いずれについても、今日では、その本来の意義や特徴は失われつつある領域といえる。本研究においては、このように、今日「キドゥン」という枠組みによって捉えられている領域を、以上の二つの角度から捉え、トゥンガハン韻律詩の歌唱が一種の美的な体験として認識される、精神性と演出性の両方を兼ね備えた表現であるのに対し、チュチャンクリマンの歌唱とは、信仰心との結びつきがより直接的であり、いわば神秘的な体験として存在した表現であることを示す。